

## Support for **Woman** Doctors ～私からあなたへ～ 「ファミリー」

小出佳代子 先生【佐賀県 17期】

宮城県登米市立登米診療所  
お子さんは小学6年生



澄子さん（左）と絹子さん（中央）がそろい、顔がヘンになるくらい嬉しい息子

佐賀 17 期の小出です。宮城・登米の診療所に来て 3 年目、小 4 で九州から転校した息子は小 6、すっかり東北のサッカー少年になりました。診療所では外来と在宅診療の日々で、4 世代にわたって地域と関われる今の毎日は充実しててありがたいです。とはいえ、達成できなかった目標・挫折はたくさんで、継続性やキャリアアップとは程遠く、あつという間に 40 代半ば。

同期の裕ちゃん、15 期の美和さん、13 期のまつめさんと、学生時代も今もスター選手のみなさんの後に続くのはそれなりに勇気が要りましたが、岩手 8 期のくに先生に廊下でにっこり微笑んで頼まれたら嫌とは言えず、2 軍の補欠のような学生だった私でも今がそれなりに楽しいので書いてみました。

息子とふたり家族の暮らしも 10 年を過ぎ、シングル子連れで地域の臨床に戻ってから 6 年目。若いみなさんの参考になるとはとうてい思えないけど、自分なりに充実した毎日になるとか辿り着けているのは、これまで有形無形で助けてくれた、たくさんのご縁のあるひとたちのおかげです。息子の健康と体力のおかげ、というのも大きい。

佐賀では初期研修後に 3 年間玄界灘の近接離島でひとり診療所勤務を経験しました。その後佐賀大学にお世話になって小児科医として過ごし、千葉のラボに研究生として所属している時に出産、いったん佐賀で小児科の教室に戻った後、息子の入学を機会に種子島の病院で総合診療の仕事再スタート。数年ブランクのある高齢者の診療や検査手技、同期との仕事はいい緊張のなかにありました。島の事情で、息子小 2 の 10 月に長崎との県境にある佐賀有明海沿岸の太良町へ小児科医として赴任、時々在宅診療もやり、その後、本格的に在宅も含めた地域での医療ニーズを求めて宮城に来て、現在に至ります。

人生を全うした方たちのご自宅での看取りや介護福祉と連携した包括ケアも、各世代のプライマリケアも、最近すこしずつ増えた子供たちの診療も、保育園から高校までの校医も、すべて生活のそばに仕事の毎日があり、私自身は女性性を

意識したことがあまり無いのですが、患者さんの生活に近いところで診ていく、という仕事は、受け手からすると女性であることの良さはあるのかもしれないと、最近になって思います。

両親が高齢などの事情もあり、それぞれの場所で、私はシッターさんにお世話になってきました。他にも近所の方々、子供の友達のご家族、現場のスタッフ、数えきれないたくさんの人々に。

保育園から小学校まで断続的にお世話になった佐賀のシッター・澄子さんは、種子島の引っ越しと一緒に来てくれて入学式にも出てくれました。種子島では当直の時によく守衛室に息子を泊めてもらい、日曜日の回診の時にはケモで入院していたエンドウのおじさんの個室で遊んで、おばさんの美味しい草餅をご馳走になったり。太良では誕生日にケーキを用意し忘れて青くなっていたら、外来ナースのじゅんちゃんがダッシュで買い出しに行ってくれたことも。私から、と息子の大好きな苺がそっとおまけにつけてありました。去年は、佐賀から澄子さんが登米のお祭りに合わせて会いに来てくれたので、今現在お世話になっている登米のシッター・絹子さんともご対面。息子はそれこそお祭り騒ぎ。最近の彼は、私の帰宅が遅い時や稀にある在宅の方の急変時には気仙沼で被災して実家のそばに家を再建したお隣の安子おばちゃんのおうちでくつろいでいます。登米では思い切って夜間や休日のコールなどバックアップもしてもらい、以前より学校や部活の行事に参加するようになりました。

育児で凹んでいるときにちょっとだけ話を聞いてもらって元気になってまた頑張れる。一緒に息子の成長を見ていてくれる。仕事へ行く背中を押して応援してくれる。みんな、私にとつては大切なファミリーです。3 月の卒業式には、絹子さんと出席しようと思います。今からその話をしたら、泣いてしまうや～、と絹子さん。

足りないことばかりの私ですが、それでも、感謝の心を忘れず、笑顔で進めばなんとかなると思い日々を過ごしています。みなさんも、ファミリー、そして隣人とのご縁をどうぞ大切に。

後輩医師・学生へ一言メッセージ

「笑顔と感謝の心で進めばなんとかなる」